

積極的に意見交換する力を育んできた子どもたち 箕面市



# 児童自らルール作り

校則の在り方が注目を集める中、小学生自身がルールを決め自分たちで考えて更新する取り組みを、大阪の教育機関「箕面こどもの森学園」（箕面市）が実践している。自身のコミュニティーに対して積極的に発言する姿勢を養い、自分たちで決めたからこそ守ろうとする自律性を育んでいる。

## 箕面こどもの森学園

嘗て法定の「学校」で営むが、学習計画から学園のルールまで子どもたちが主体的に決める仕組みを徹底。教育内容とともに、持続可能な社会づくりに役立つと、国連教育科学文化機関（ユネスコ）からユネスコスクールに認定されている。

■全員で「納得」 同学園では、学校全体にかかわる案件は、週1回の全体集会で議案として出す。児童約50人と、一般の学校で

出たときは、大人も交えて議論が白熱。大人は「視力や成長期の脳によくない」と主張したが、児童の思いも強かった。意見をすり合わせた結果、月1回持ち込める日を設定することで合意した。

## 発言する姿勢、自律性育む

「思考停止」防げ 決めっぱなしにしないのも重要。児童は毎学期、自分がルールを守れたかを振り返り、チェックする。守安あゆみ副代表理事は「自分たちで決めたからこそルールを守るようになり、安全や安心が保たれる」と分析する。

ただ、困ったことも起きた。ルールを作り続けた結果、2016年度には100項目を超えてしまった。児童らは盛り込まれていない内容について、守らなければならない理由まで考えず、「ルールだから」と思考停止になりかけている面があった。そこで17年度には、内容の整理を担当する「ルール委員会」を常設。今は必要なかったり重複している内容を児童とスタッフで議論し、約50項目にまで減らした。

守安副代表理事は「議論では、勝ち負けではなく、皆が納得できる道を探るようになっていく。自分も話を聞いてもらえらるから、自分と違う意見も我慢強く聞ける。取り組みが浸透していけば、全ての人が自分らしく生きていける社会になるのでは」と意義を説いている。（加屋宙磨）